

保育者を目指す学生に求められる 音楽表現力の育成について

On the development of musical expressive power required of students aiming for childcare

山田麻美子
(Mamiko Yamada)

要旨：

養成校における保育内容「音楽表現」授業での「グループによる音楽遊び指導案作成と発表」において、音楽的初心者が半数以上いる養成校の学生では、毎年、ピアノや楽器に精通している学生が中心となり、初心者学生は積極的に活動に参加しているとは言い難い状況であった。そのため、今年度の授業においては経験のない初心者であっても積極的・自主的に活動が立案でき、グループの中心になれるような状況をつくり出せることを目指して4つの活動を重点的に行った。その結果として、「身の周りにある物の音を聴く」「オノマトペ遊びとオノマトペブックの作成」「擬音付き絵本の読み聞かせ」の3つの活動については経験者・初心者に関わらず、活動を楽しむことが出来たといえよう。しかし一方で、「童謡に合わせた拍送り遊び」については、初心者学生は経験のある学生のサポートにより活動を行うという結果になった。このことは、音楽的な基礎ともいえる「拍」に対する感覚がまだ十分に備わっていないことを示すものであると考えられ、音楽の核をなす「拍」・「拍感」の育成を目指し、子どもも大人も共に楽しめるような「拍」に関する「遊び」を工夫することが課題であると考えられた。

キーワード：保育者・保育者養成・音楽遊び・音楽表現力

I はじめに

保育者を目指す学生にとって、音楽表現力を身に付けることは欠かせないものである。子どもの様々な表現、特に音楽的な表現を受け止め、支援し、子どもの感性と創造力を豊かに育てるために、保育者の豊かな音楽表現力はなくてはならないものであるといえよう。子どもは保育者を通して、音楽の楽しさや心地よさを体感するのである。しかしながら、保育者及び保育者を目指す学生にとって、音楽は果たして心地よいものと捉えられているであろうか。趣味として通勤・通学の行き帰りに聴く好みのジャンルの音楽は別として、現場で子どもたちに行わせる歌唱や楽器などを使った音楽的活動、或いは養成校で修得する「音楽」関連の授業に対して、何らかの抵抗感があるのではないだろうか。音楽と言えばピアノ、ピアノは苦手、すなわち音楽が苦手、音楽は不得意といった気持ちが先に立ち、心から心地よいと思えることは少ないのではないだろうか。音楽を聴いて体感する高揚感や開放感、癒され

る感じ、また、音楽の演奏を通して味わう深い満足感などはごく一部の保育者及び保育者志望の学生のものではないだろうか。そうであるとすれば、それは何故であろうか。筆者は保育者養成校において、音楽関連の授業を行う度にそのような気持ちを抱いていた。また、その原因を探りたいとも考えている。音楽は楽しいもの、心地よいものであり、子どもも大人も万人が楽しむものでなければならない。子どもたちの前で音楽は楽しいものだということを共に感じ、楽しく活動を実践していかなければならない。そう感じられる保育者を育てるためには、どのような授業を行い、どのような提案をしていけば良いのか、試行錯誤の繰り返しである。

本稿では、保育内容「音楽表現」の授業において、特に音楽的技術について初心者である学生が音楽を楽しめるのだと感じ、子どもたちとの関わりの中で共に楽しむことのできる音楽的活動の実践、省察を通して、保育者を目指す学生の音楽表現力の育成について考察を行うこととする。

1. 研究の背景

幼稚園教育要領（2017）、保育所保育指針（2017）ならびに幼保認定型子ども園教育・保育要領（2017）に記されている共通項として、幼児教育において育みたい資質・能力のベースとなる「3つの柱」に加えて、育みたい「10の姿」が設定され、5歳児の終わりまでに目指したい育ちの姿が具体的に示された。以下に詳細を示す（表1）。

また、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保認定型子ども園教育・保育要領における領域「表現」の冒頭には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と記されており、「ねらい及び内容」についても共通している。以下にねらいと内容の詳細を記す（表2）。

表1 幼児教育を行う施設として共有すべき事項

幼児教育において育みたい資質・能力	
1. 知識及び技能の基礎	豊かな体験を通して感じたり、気づいたり、分かたり、できるようになったりする。
2. 思考力、判断力、表現力等の基礎	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする。
3. 学びに向かう力、人間性等	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	
1. 健康な心と体	幼稚園や保育所の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
2. 自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
3. 協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

4. 道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
5. 社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりを意識するようになる。
6. 思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
7. 自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛着や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
9. 言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
10. 豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことなどを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

表2 領域「表現」のねらい及び内容

ねらい
1. いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 2. 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 3. 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内 容
1. 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 2. 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 3. 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 4. 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。 5. いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 6. 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどする楽しさを味わう。 7. かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 8. 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

要領に示された「ねらい及び内容」は、幼児だけではなく、保育者及び保育者を志す学生が持つべき資質としてもあてはまると言ってもよいのではないだろうか。上記に挙げた「表現」の内容のうち、音楽的なものを示しているのは1、4、6と考えるのが妥当であろう。しかしながら、2、3、5、7、8においても音楽活動を行う上で非常に重要な関連があると考えられる。

伊藤（2011）は、保育者に求められる音楽表現力について「保育者に求められる音楽表現力とは一体何か、と考えた時、これらは単一ではなく複合的な要素で構成されているといえよう。より豊かな音楽活動の世界に幼児をいざなうことの出来るピアノ演奏技能は、保育者にとって確かに魅力的なことではあるが、それは難易度の高いピアノ曲を完璧に弾きこなす演奏家としての技量が求められている、ということと同等のものではないであろう。かといって、保育者自身の音楽性、音楽能力が稚拙であってもよい、ということではない。幼児の音楽表現を伸長させていくには、様々な形で表れる幼児のひたむきな表現の芽に柔軟に対応できる音楽性、そして何よりも保育者自身の豊かな感性が求められるとあってよいだろう。」と述べている。「様々な形で表れる幼児のひたむきな表現の芽」に柔軟に対応できる保育者を目指すには音や音楽のみならず、生活や遊びの中での子どもの全ての表現に気付き、受け止めることのできる豊かな感性が必要であると考ええる。

一方で、2019年度から施行される新教職課程では、「小学校教育と幼児教育の違いの明確化」が謳われ、幼稚園教諭に求められる資質・能力を養成するために、5領域に関する専門的事項と、5領域を指導する力・実践力という2つの側面が必要であると考えられ、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が設定された。その基準となる「コアカリキュラム」の導入により、それぞれの科目において、「どのように支援するか、実施するために何が必要か」という観点を中心に授業を組み立てることが求められることとなった。それとともに、学生には具体的な指導場面を想定して保育を構想する力を身に付けることが求められることになった。

本学においても、5領域を指導する力を養成する保育内容に加え、新たに「子どもと表現」「子どもと環境」などの5領域の専門的事項に関する科目が新設されることとなった。保育内容「表現」においては音楽表現・造形表現・身体表現という3つの分野に分かれていたものを、2019年度より、保育内容「表現Ⅰ」及び「表現Ⅱ」に改め、「表現Ⅰ」では造形表現と音楽表現、「表現Ⅱ」では身体表現と音楽表現の分野が協同し合う総合的な表現の指導法を学ぶことになる。したがって、学生の主体的かつ対話的な学びにつながるような授業への工夫が求められると考える。

このことにより、保育者養成校においては、子どもの表現に寄り添うことのできる保育者を育成するために、表現を多面的、総合的なものと捉えていくことが必要であると考ええる。音楽表現においても、音楽＝ピアノという従来のこだわりを取り払い、様々な音楽活動の可能性について追及し、構想することが大切ではないかと考えるものである。

以上のことを踏まえて、本稿では2018年度実施の保育内容「音楽表現」の授業内容に着目し、その授業実践がこれからの幼児教育を担っていく保育者の養成にふさわしいものであるかどうかについて再考し、改めて音楽表現力とは何かということについて考えてみたい。具体的な研究方法として、保育者養成校A短期大学における2018年度保育内容「音楽表現」の授業の中で行った幾つかの表現活動に焦点を当て、教員による授業記録の省察及び学生への

質問紙調査から考察を行っていきたい。

Ⅱ. 研究の方法

本研究の対象及び調査時期は以下の通りである。

1. 2018年度保育内容「音楽表現」授業記録（2018年4月～2018年7月）
2. 2018年度保育内容「音楽表現」授業における受講学生40名への感想シートによる質問紙調査（2018年4月～7月実施）
3. 手続き

授業記録及び調査結果の公表については個人情報保護のため本研究の目的以外には使用しないこと、授業記録及び調査結果の確認には本研究者のみとし、個人の情報を公にはしないことを伝えて協力を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. 問題の所在

保育内容「音楽表現」は選択必修の授業であり、毎年40名程度の学生が受講している。

筆者が授業を担当した2014年度～2017年度においては主に音楽遊びを中心としたグループ活動（指導案作成及び模擬保育を含む）を行ってきた。全15回のうち11回までの授業において、素材の音・楽曲（童謡など）・拍・拍子・リズム・リズムパターン・身体の動きなどを伴った様々な音楽遊びを教員が提示し、12～14回の授業においては提示された活動の中から、子どもの前で行うことを想定した音楽遊びをグループで決定し、指導案作成と練習を行い、最終回に模擬保育の発表を実施するという内容であった。

今年度の保育内容「音楽表現」受講者数は例年と変わらず40名という数であった。音楽経験としては初心者21名、ピアノ経験のある者が10名、管弦打楽器経験者が9名という内訳であり、ほぼ半数が初心者ということになる。例年同じような割合で初心者が約半数を占めることから、前年度までの上記に述べたような活動実践においては、グループのメンバー（5～8名程度）のうち、音楽の得意な者、ピアノの上手な者が主導権を握り、グループを引っ張っていくという構図になってしまい、後の学生はただ言われたままに動くだけという状況が毎年見受けられた。グループの成果発表としてはまとまりの良いものが多かったが、将来、子どもたちの前に保育者として一人で立つことを考えると、子どもたちとともに音楽を通して楽しく関わることでできる能力の育成が急務であると考えられた。音楽にあまり興味のない学生も、ピアノの不得手な学生も、現場で、子どもたちと音や音楽を通して、何かしらの楽しい遊びや活動ができるような指導力をつけるための授業実践を行う必要があると捉えられた。

2. 2018年度保育内容「音楽表現」授業記録からの省察

2018年度保育内容「音楽表現」授業概要をいかに記す（表3）。下線部①～④は今年度特に重点的に行った活動であることを示している。

今年度の保育内容「音楽表現」では、音楽技術的初心者であっても楽しめると思われた4つの活動に重点をおいて授業を行った。4つの活動は①「素材の音を聴く」②「オノマトペで表現を楽しむ」③「童謡に合わせた拍送り遊び」④「年齢別の絵本に擬音をつけて読み聞

表3 保育内容「音楽表現」授業概要

回数	授業内容
第1回	ガイダンス 授業の内容・方法・進め方についての説明。
第2回	領域「表現」の概観について学ぶ。音楽の三要素・①素材の音について・「音を聴く」音遊びについて学ぶ。
第3回	音と音楽について学ぶ。②③オノマトベ・拍・リズムについて学ぶ。 ②オノマトベを使った表現について学ぶ。グループ活動。
第4回	音楽と動き、音楽と表現について学ぶ。③拍子について学ぶ。 ②オノマトベを使った表現について学ぶ。グループ活動。
第5回	音楽の流れと動きについて・③拍・拍子・リズムについて学ぶ。 ②オノマトベを使った表現について学ぶ。グループ発表。
第6回	音楽の流れと動きについて・リズムパターン・フレーズについて学ぶ。 ③拍とリズム遊び実践・グループ学習。
第7回	音楽の流れと動きについて・リズム遊び・手遊び・あそびうたについて学ぶ。
第8回	音楽の流れと動きについて・リズム遊び・手遊び・あそびうた・身体の動きを伴った音楽遊びについて学ぶ。
第9回	リズム遊び・音楽遊び・身体の表現を伴った音楽遊びに使用する楽器を選ぶ。
第10回	乳幼児期の発達段階と表現について学習する。④年齢別の絵本の研究をする。音楽遊びのための簡単なピアノ伴奏法及び楽器演奏法について学ぶ。④擬音について学ぶ。
第11回	音楽表現における保育者の役割・音楽的環境について学ぶ。音楽遊び指導案について学ぶ。②オノマトベブック作成のための説明と準備。
第12回	造形表現・音楽表現の総合的な活動実践④擬音付き読み聞かせ準備・年齢別絵本の選択・グループ学習・②オノマトベブック作成。
第13回	造形表現・音楽表現の総合的な活動実践④擬音付き読み聞かせ・役割分担グループ学習・②オノマトベブック作成。
第14回	造形表現・音楽表現の総合的な活動実践④擬音付き読み聞かせ・グループ模擬発表・指導案提出・②オノマトベブック提出。
第15回	④擬音付き読み聞かせグループ発表・評価と課題のまとめ。

かせをする」というものであった。以下、各活動実践について結果と考察を述べる。

①「素材の音を聴く」

「素材の音を聴く」活動は全15回のうち第2回目の授業において行った。「音を聴く」ということは子どもにとっても、保育者養成校の学生にとっても、保育者にとっても非常に重要なことであると筆者は考えている。なぜなら「音を聴く」ことは「話を聴く」ことにつながると考えられるからである。「あれ、今、何か音がしたよ、何の音だろう。」と音に向けて興味を持ち、その音がどこから聞こえているのかを探ろうとする気持ちは「先生が話し始めたよ、先生は何について話しているのだろう。」という気持ちに直結していくものであり、集中力・傾聴力・理解力など様々な能力の基本になるものと考えている。

「素材の音を聴く」活動において楽器は使用せず、身の周りにある色々なものがどのような音を発するのかを聴いていく。筆者がこの活動において使用する物は、例えば鍋・紙や木、プラスチックでできた箱・しゃもじやお玉・ガラスの瓶・ボタン・ビーズ・文房具など、様々

である。授業ではまず教員が教卓の上に置いた色々な物の音を出して学生が聴き、次に学生からは物が見えないように工夫した後、再度音を聴き、何から音が出たのか再現するように声掛けする。筆者は保育現場においても過去にこのような活動を行ったことがあり、その時は子どもたちの「我こそは」と言わんばかりに「ハイ、ハイ」と手を挙げる元気よさについて笑いがこみあげてきたのを覚えているが、授業においては前に出て再現しようとする学生はあまり多くはないため、一人が出て再現した後、次の再現者を学生同士で指名してもらうことにしている。また、これらの音の再現は後に行う「オノマトペ」や「擬音付き読み聞かせ」活動にもつながっていくことから、音を当てると同時に素材が何で作られているかについても考えるようにしている。楽器が音を出すことは当たり前であるが、身の周りにある様々な物の音は日頃何気なく聞き逃していることが多いと思われ、それらの物に焦点を当て、素材は何であるのか、その物からどのような音が出るのか考え、聴くことにより、色々な意味で物や音に対する再発見があると捉えている。

教員が準備した物の音を聴いて再現する活動の後、事前に学生に伝えて準備させた物の音を順番に出してもらい、皆で聴くという活動を行う。キーホルダー・洋服のジッパー・文房具・靴のマジックテープ開閉音など一人ずつが準備した音を再現する。これらの活動は、楽器の音だけが音ではなく、物の音、自然界の音も音であり、音楽にもなり得ることを確認しあう活動である。現場においても子ども達と簡単に音の発見や再現ができ、楽しめる活動であると考えている。

②「オノマトペで表現を楽しむ」

「オノマトペ」とはフランス語で擬声語・擬音語・擬態語の意味である。例えば「犬」を表すときに「ワンワン」、「猫」は「ニャーニャー」、風は「ヒューヒュー」といったように、声、物の音、自然界の音、様々な状態を言葉に替えて表すものである。まず教員がイラストを使って色々な物を挙げ、それらを表す音（オノマトペ）を考えさせる。この時に学生たちは同じ犬を見ても「ワンワン」というか、「ウーウー」というか、「キャンキャン」というか、人により違うことを認識することができ、音の受け止め方が幾様にもあることに気づく。

次に3～6名のグループに分かれ、例えば家の中の音（台所）などとテーマを決めてオノマトペを幾つか考える。グループで使う音を確認し合い、それを物語に発展させる。第3回授業・第4回授業において相談・練習した後、第5回授業でグループ発表を行った。学生が考えた物語のテーマは「イニシャルR」（レーサーの一日）・「イモ」・「風が吹く一日」・「動物園」・「犬の一日」・「Mちゃんの日」・「運動会」・「朝の支度」であり、短時間ではあったが、それぞれのグループで物語の読み手・擬音担当・身体表現担当の分担を決めて、楽しい表現発表となった。発表において、メンバーで話し合い、それぞれが自分の得意とするところを担ったことが推察された。

この発表後、各自に「オノマトペブック」の作成を課題として出し、15回授業後に提出とした。「オノマトペブック」は子ども達と関わる時にも絵を見て、どんな音が出るか一緒に考え、実際に音を出し合うなどの活動ができることから、音楽的初心者であっても子ども達と音を通して楽しく関われる活動実践例であると考えられる。

③「童謡に合わせた拍送り遊び」

音楽はメロディ・リズム・ハーモニーの三要素から成り立っているが、その中でもリズムは重要な欠かすことのできない要素である。何故ならば、メロディの中にもハーモニーの中

にもリズムは存在するからである。また、リズムは拍・拍子・リズムパターン・フレーズと構成されていくのであるが、これらにおいて筆者は最も重要視すべきは拍であると考えている。音楽における拍は人間の心臓の鼓動に匹敵すると考えられる。拍の上に拍子が成り立ちリズムが出来、リズムの組み合わせによりリズムパターンとなり、メロディやハーモニーとともにフレーズが構成され、曲へと完成するのである。これから成る曲を歌い演奏する際に、リズム・メロディ・ハーモニーへの認識については多くの人が留意するところではあるが、拍に対してはほとんど注意が向けられない。しかし拍が乱れるとどうなるか、人間の心臓の鼓動が乱れることを想像すれば容易に考えつくのではないだろうか。したがって、筆者は幼児期から「拍感」の育成は非常に重要であるとの見解をもっている。

歌を歌うとき、楽器を演奏するとき、人は音楽の流れにそって気持ちよく歌い演奏するが、多くの場合、ともすれば次第に速くなりがちである。また、特にたくさんの人と一緒に歌い演奏するとき、テンポが一定でないことが良い演奏につながらないことは明らかであろう。そのような時に重要となってくるのが、それぞれの人の持つ拍感である。拍感がすぐには身につかないこともあり、幼児期の正しい拍感の育成は保育者にとって重要な責務であると考えている。養成校の学生においても然りで、正しい拍感・リズム感・テンポ感を身につけている学生は少ない。そこで「童謡に合わせた拍送り遊び」を考案し実践するようになった。これは授業では教員の弾くピアノに合わせて行うことが多いが、必ずしもピアノでなくとも、打楽器等で打つ拍や皆で歌う歌のみでも構わないと考えている。以下実施方法を述べる。

第5回目・6回目の授業において、クラスを3つのグループに分け円形に着席してもらい、スタートの人を決め、簡単な童謡（「ちゅうりっぷ」や「キラキラ星」など）に合わせて、時計周りに一人1拍ずつ隣の人に手拍子で拍を送るように伝える。この場合にただ単に手拍子を「ボン」と一つ叩けばよいのではなく、音楽をよく聴きながら、1拍の音を大切に隣の人に送るように、という指示をあたえる。教員がピアノを弾く場合には必ず前奏のあることを伝え、合図をせず前奏の後にすぐ始めるように伝える。このように前奏に注意を払うことにより、音・音楽を聴くことが身に付く。音楽を始める場合には間違っても「セーノー」などという合図は出さないことも付け足しておく。

前奏を聴いて、最初の人が始まり順番に隣の人にスムーズに拍送りができるようになってきたのを確認し、次に逆方向への合図を出す人を1名選ばせる。選ばれた学生はタンバリンを持って3つのグループ全員から見えところに立ち、音楽の途中でタンバリンを一つ叩いて合図し、拍送りを反対回りに変えさせる。この役目は簡単そうで、実はやってみると意外と難しい。どこでタンバリンの音を鳴らせば良いのか、迷いが生じるからである。童謡は4分の4拍子であることが多いので1小節を4拍と捉えることになるが、合図の音は4拍目に出す方がスムーズである。そのような説明を交えて皆で役割を交代しつつ、歌いながら、あるときは笑いながら拍送り遊びを行うこととなる。グループの中にはうまく拍にのれず、拍送りが止まってしまう光景もしばしば見受けられたが、周りの学生のサポートを受けながら、何とかこなすことが出来た。この遊びについては前述①②とは違い、音楽的初心者のみでは成功させることは少々難しいと思われた。ただ、学生同士のみの場合においては、お互いに助け合って歌いながら楽しく遊びができると考えられた。

④「年齢別絵本に擬音をつけて読み聞かせをする」

この活動は第12回からの「造形表現・音楽表現の総合的な活動実践」に属する活動であり、

第10回「乳幼児期の発達段階と音楽的表現について学習する。」という内容とも関連して行う活動である。第10回授業において乳幼児の発達段階を学び、その知識を元にグループで学内の図書室に行き、5～7名のグループごとに年齢別の絵本を選択した。教室に持ち帰り、絵本の読み聞かせを行い、場面ごとに効果的な擬音を考える作業を行った。11～12回の授業において、絵本の再選択及び擬音の効果的設定、役割分担など、何度か活動を行ううちに、次第に擬音付読み聞かせが完成していった。絵本の読み聞かせの前に手遊びを入れることも課題とした。以下にグループ別の手遊びと絵本のタイトルを記す（表4）。

表4 グループ別擬音付き読み聞かせ・手遊び歌及び絵本

班	手あそび歌	絵本	対象年齢	擬音使用楽器等
1	ひげじいさん	ほちほちいこか	2～3歳	キーボード・大太鼓
2	さかながはねて	よるくま	3歳	ピアノ・ツリーチャイム・声・箱 他
3	パンやさんにおかいもの	ふゆじたくのおみせ	5歳	マリンバ・鈴
4	おはよう	はりねずみのくるりん	2～3歳	ピアノ・ドラム 声・歌「さんぽ」
5	やさしいもグーチャーパー	さつまのおいも	2～3歳	声
6	はじまるよ	そらまめくんとめだかのこ	3歳	マリンバ・シンバル
7	グーチョキパーでなにつくろう	ぐりとぐらのえんそく	4歳	ドラムセット・ウッドブロック

ほとんどのグループが2～3歳児向けの絵本を選択した理由としては、物語があまり複雑ではなく、効果的な擬音設定ができると考えたことが推察された。擬音設定については準備に時間がかかったが、グループごとに工夫を凝らしている様子が見えてきた。7グループのうち、ピアノ・キーボード系の鍵盤楽器を使用したグループは3グループあり、そのうち1グループは箱など色々な物も合わせて使用していた。擬音が声のみというグループは1グループ、マリンバと打楽器の組み合わせが2グループ、最終グループはドラムセットとウッドブロックという組み合わせであった。声のみというグループ以外の6グループではツリーチャイムが使用され、ツリーチャイムの人気を確認された。ピアノやキーボード使用のグループが半数以下であったことから、ピアノやキーボードなどの鍵盤楽器はメロディや伴奏を弾くという固定観念から離れられないのではないかということが示されたように思う。打楽器としての鍵盤楽器の使い方について今後は提示する必要があると考えられた。

発表では発表するグループの次々グループが子ども役になり、読み聞かせを楽しみにする子どもたちの様子を表現していた。初めに行う手遊びが絵本の内容と共通している方がやはり本への期待感が倍増するように思われた。読み手がゆっくり、はっきり読んでいるグループ、たくさん擬音を使い表現を盛り上げているグループ、効果的にタイミングよく擬音を入れているグループ、擬音は声のみであるがオノマトペで行ったように全員の声で擬音を表現しているグループ、絵本そのものが関西弁で書かれているため発音に苦労しつつ頑張っているグループなど、グループごとに個性の表れた発表になったと思う。また、何よりよかつ

たことは発表にありがちな緊張感があまり感じられず、終始笑顔で発表出来たことである。発表前には口々に「緊張する」などと漏らしてはいたが、いざ発表となると皆、笑顔で楽しそうに行っていたことが印象的であった。

以上①②③④の活動を紹介したが、前年度までの音楽遊び指導発表と大きく違ったことは、学生の楽しそうな表情が見られたことであった。特に①②④の活動においてそれが見受けられた。人前で表現するということは緊張感を伴うことではあるが、どんな人でも簡単に実践できる活動を行うことにより、緊張感が幾分減少し、楽しさが増すと考えられた。音楽表現においては、ピアノ伴奏を伴う活動が多く存在し、ピアノ初心者・音楽的初心者にとってはハードルの高い活動になりがちであると思われる。音楽の基礎的・本質的なところに位置する今回の活動（特に①②④の活動）は、音楽的初心者にもたやすく子どもと活動が楽しめることが察せられた。③の活動については、一人ずつ音楽（拍）にのせて手拍子を打っていくという活動であるため、拍感・拍子感・リズム感が確立していない初心者学生には難しい活動であると考えられる一面もあった。従ってこの活動については音楽的初心者であっても、子どもたちと楽しく行えるとは言い切れないことが推察され、拍感の育成については今後の課題であると捉えられた。

2. 2018年度保育内容「音楽表現」授業における受講学生への質問紙調査からの結果と考察

2018年度保育内容「音楽表現」受講者40名に対してそれぞれの活動後に感想シートによる質問紙調査を行った。前述のように40名のうち音楽的初心者は約半数の21名であり、ピアノ経験者10名、吹奏楽部などでの管弦打楽器経験者は9名であった。以下に項目ごとの回答結果を記す（表5～8）。なおいずれの活動に対しても感想は自由記述式・複数回答とした。

①「素材の音を聴く」活動調査からの結果と考察

表5 素材の音を聴く活動調査結果

回 答	人数
これまで音楽は楽器だけで音を出すという固定観念があったのでこの活動は新鮮であった。	40名
色々な身近にある物で音をだすのが楽しかった。	35名
子どもたちとこの遊びを通して、物の名前や素材を教えることができるので良いと思った。	32名
自分たちも素材を知らないで使っていることがわかり恥ずかしかった。	28名
音楽が得意でなくても、ピアノが弾けなくても出来る活動だったので安心感があった。	20名
色々な物の音を聴くことで音に対して興味が湧くと感じた。	18名

「素材の音を聴く」というこの活動は子どもにも大人にも簡単に行うことが出来、音に対しても興味をもつことが出来るため、毎年楽しく行っている活動であったが、学生の感想からも音に対する興味や関心を引き出すことができたように思われる。日頃当たり前のように使っている鍋や食器、箱やケース、文房具など様々な物に対して改めて向き合うことで、物を大切に使う心も生まれ、物から出る音にも関心を持ち、出る音に工夫を凝らし、また、物

の素材を考えることができることから、音楽の原点に立ちかえり、音と向き合うことが出来ると考える。現場でも積極的に行ってもらいたいと思う活動である。

②「オノマトペで表現を楽しむ」活動調査からの結果と考察

表6 オノマトペ活動調査結果

回 答	人数
オノマトペという言葉を知り初めて聞き、難しそうに感じたが、色々な動物などの音を考え、その声を真似てみるのが楽しかった。	39名
オノマトペを使ったお話をすることは、ただ単にお話作りだけではなく、音からも想像できるのでやりやすかった。	35名
動物の鳴き真似などがとても上手な人がいて感心した。子どもたちが喜んでくれると思った。	32名
動物や乗り物の音だけではなく、人が出す音（コツコツ歩く）や人の状態（ふぁーあ、眠そう）の音なども出せることがわかって面白いと感じた。	26名
オノマトペブックを作っておけば、現場で子どもたちと楽しく遊べると思ったし、実習などでもつかえるのではないと思った。	18名
オノマトペを声で表すのは少し恥ずかしかったが、やってみると楽しかった。	5名

オノマトペは前述したように擬音語、擬態語、擬声語という意味であり、様々な動物、人の様子などを声で表すことを言う。学生は初めての経験であったようだが、概要を説明した後に、早速色々と真似て声を出し楽しんでいる様子が見られた。3～6名程度のグループに分かれ、オノマトペを表す場面（例えばキッチンやお風呂場、動物園や街の中など）を決め、具体的な音を考えてお話づくりを相談しながら練習を進めていった。こちらの予想以上に楽しんで取り組む姿が見られ、発表においても各グループが物語風に楽しそうに演じていた。このことから、身近な物、生き物、光景、状態などを簡単な言葉で表せるオノマトペ遊びは、子どもたちにとっても日頃の遊びの中で取り入れていける活動であると考えられた。

③「童謡に合わせた拍送り遊び」活動調査からの結果と考察

表7 童謡に合わせた拍送り活動結果

回 答	人数
「拍」「拍感」という言葉を初めて意識した。「拍」の大切さに気付いた。	38名
「拍感」と「リズム感」の違いがわかった。	36名
手拍子を打つことはこれまでたくさん行ってきたが、曲に合わせて「拍」を大切に感じながら隣の人に送ることは、思った以上に難しいが、慣れてくると楽しいと感じた。	35名
「拍送り」と「リズム送り」を途中で変えるのは難しかった。合図を出す、合図で方向を変えることの両方で戸惑いがあった。	24名

「拍送り」という活動において、初めて「難しい」という回答がみられた。普段何気なく手拍子を打ったりしていることを、改めて音楽的に、拍ののって送ることの難しさに直面したように感じていることがわかった。手拍子を打つということは、人の行為の中でも多く行う行為であろう。スポーツの試合に臨むとき、応援するとき、試合が終わって勝利を祝うと

き等々手拍子は欠かせないものであろう。しかし、そこに拍が生まれ、拍子が存在していることに、大半の人は気づかないであろう。故に改めて音楽という枠の中での「拍送り遊び」で、拍を意識し、拍子やリズムにも考えを巡らせることにより、戸惑いや難しさを感じたのではないかと推察される。

しかし、将来保育者になる学生であるからこそ、拍感の大切さ、拍子感やリズム感の大切さに気付けたことは、大変有意義なことであり、この意識をもって子どもたちとの関わりの中で、子どもたちが音楽的な「拍感」を体感できるように援助してもらいたいと考えている。

④「年齢別絵本に擬音をつけて読み聞かせをする」活動調査からの結果と考察

表8 擬音付き読み聞かせ活動結果

絵本と対象年齢	感想	人数
ほちほちいこか (2～3歳)	擬音がわかりやすかった。	33名
	関西弁の雰囲気ユニークだった。	25名
	もう少し声を通ると良かった。	2名
よるくま (3歳)	擬音が多く効果的だった。 擬音があることで絵本に引きこまれた。 声が通っていて聞きやすかった。	24名 23名 21名
ふゆじたくのおみせ (5歳)	長い本だったが、読み手がゆっくりはっきりしていてとてもわかりやすかった。上手だった。	30名
	笑顔で手遊びや読み聞かせができた。	28名
	オノマトベを声ではなく楽器で行っていて興味深かった。	18名
はりねずみのくるりん (2～3歳)	ピアノと歌が上手だった。	34名
	擬音をうまく工夫していた。	26名
	声がよく通っていた。	24名
	絵本からあいさつの大切さがよくわかった。	5名
さつまのおいも (2～3歳)	楽しそうに行っていて、こちらも楽しくなった。	34名
	手遊びと絵本の関連が良かった。	27名
	ゆっくりの読み方で聞きやすかった。	25名
	子ども役への声かけが適切だった。	21名
	本の選択が良いと思った。	18名
そらまめくんとめだかのこ (3歳)	読み手の話し方が大変聞きやすく上手だった。	32名
	雨の音などの擬音も場面を表現するために大変適切だった。	29名
	わかりやすかった。 笑顔が良かった。	26名
ぐりとぐらのえんそく (4歳)	擬音がたくさんあり、場面をユニークに表現していて面白かった。	36名
	擬音と読み手のタイミングが完璧だった。	36名
	ドラムを使用していて新鮮だった。	34名
	グループの人数が少なかったのに一番楽しそうに行っていてこちらも楽しくなった。	34名

「年齢別絵本に擬音をつけて読み聞かせをする」活動は事前（第10回授業）に年齢別絵本についてグループで研究したこともあり、スムーズに活動が進行した。10回で選択した絵本を使うグループ、違う絵本を選択したグループと様々ではあったが、絵本の内容を熟知した上で擬音やオノマトベの音を工夫したようであった。

大多数の感想はよかったこととして捉えていたが、2名からの「もう少し声を通るとよかった」という感想が見られた。しかし、回答者の数値も低いことから、恐らく受け止め方の問題になるかと思われた。全体の感想から読み取れることとしては、オノマトペ及び擬音（効果音）についてグループにより様々な工夫があったこと、絵本の読み手の声の通り具合・読む速度などでわかりやすい表現になったこと、擬音と読み手のタイミングが合っていたかどうかで読み聞かせの成果が異なってくると感じたこと、グループ全員が楽しんで行っていたかどうかにより、聞き手の気持ちが変わったこと、笑顔が見られたことについても聞き手の気分の変化があったこと、事前の手遊びが絵本の内容と合っていることなど、多くのことが推察された。

これらのことにより、ただ単に絵本の読み聞かせを行うだけでなく、少しの工夫で受け止め方が大きく違ってくるということが判明したといえよう。絵本に合った様々な音の工夫では楽器のみを考えるのではなく、その場にある色々な物で効果音を考え出すこと、なおかつ読み手に合わせてタイミングよく音を発することなどが、重要なことであると考えられた。

3. まとめ

前述したように保育内容「音楽表現」において、例年はグループによる「音楽遊び」指導案作成と模擬保育発表を行ってきたが、音楽的初心者が毎年半数以上いる養成校の学生では、ピアノや楽器に精通している学生が中心になることが多く、初心者学生は積極的に活動に参加しているとは言い難い状況であった。そのことから、今年度の授業においてはピアノや楽器経験のない初心者であっても積極的・自主的に活動が立案でき、グループの中心になれるような状況をつくり出せることを目指して4つの活動を重点的に行った。

その結果として、みえてきたことは「身の周りにある物の音を聴く」「オノマトペ遊びとオノマトペブックの作成」「擬音付き絵本の読み聞かせ」の3つの活動については経験者・初心者に関わらず、活動を楽しむことが出来たといえよう。これらの遊びを現場においても、子どもたちと共に積極的に言い、子どもたちに様々な物の音や音楽の楽しさを体感してもらいたいと考えている。

しかし一方で、「童謡に合わせた拍送り遊び」については、うまく拍にのれない者や止まってしまう者が、グループの中に数名ずつ存在したため、周りの学生のサポートで何とか活動が終了するという結果になった。このことは、音楽的な基礎ともいえる「拍」に対する感覚がまだ十分に備わっていないことを示すものであると考えられた。音楽を長い間学んできた者にとっても「拍」に対する自覚はあまりないといってもよいかもしれない。リズム感・テンポ感・音感などは常に意識されているが、「拍」に対する意識は全体的にまだまだ薄いと言えるのではないだろうか。しかし、音楽の主要な要素であるリズム・テンポ・メロディ・ハーモニーの全てを支えているのは「拍」であり、「拍感」であると筆者は考えている。今後は子どもも大人も共に楽しめるような「拍」に関する「遊び」の立案を目指していきたいと考えるものである。

引用文献・参考文献

- 伊藤仁美（2011）「保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察」子ども教育宝仙大学紀要
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針（2017年告示）』フレーベル社
- 近藤久美（2007）「保育者を目指す学生の音楽観－保育者養成校における音楽授業の在り方について－」一宮女子短期大学紀要 No.46 95-105
- 溝口綾子（2012）「保育内容の指導法『表現』における授業方法の検討」帝京短期大学紀要No.17 7-9
- 文部科学省（2016）「中央教育審議会・教育課程部会・第9回幼児教育部会取りまとめ（案）」
- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領（2017年告示）』フレーベル社
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』フレーベル社
- 無藤 隆・浜口順子（2007）『事例で学ぶ保育内容 領域 表現』萌文書林
- 無藤 隆（2016）「生涯の学びを支える『非認知能力』をどう育てるか－これからの幼児教育－」ベネッセ教育総合研究所
- 山中愛美（2016）「『保育内容・表現』におけるオペレッタの授業実践」夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 No.6 49-52

謝辞

本稿作成に際し、質問紙調査に協力頂いた本学学生の皆様に厚く御礼申し上げます。